

松本侑子

内面はオヤジ、趣味は女装。

知らないことを知るといことは、人間にしかできない知的な活動だと思えます。
こんなに楽しいことはないでしょう？

取材・文◎あさかよしこ
写真◎ハリー中西
取材協力◎インターナショナルアカデミー・国際観光旅館銀閣



ひらめきも
日頃の蓄積がないと

子供のころから、マリリン・モンローが大
好きだった。

「もう好きで好きで……。セクシーっていうのはまだよくわからなかったと思うんですが、きれいでかわいくて。ところが思春期くらいになったら、「なんで彼女は、あんなにお尻をふって歩くんだろう。なんであんなバカみたいな話し方をするんだろう」って思うようになったんですね。そして、もしかしたら私自身も、好きな男の前では、お尻をふったりはしないまでも、それに類似した、例えばバカみたいな話し方をするかもしれないな、という自己嫌悪のような気持ちと、ものすごく彼女が好きだという気持ち、この相反する二つが同居しはじめたんです。そういう事をつきつめて考えたいと思った時から、書くという作業が始まっているような気がします」

松本侑子の作家としての芽は、こんなところにあった。

「小説の発想のもとになることは、短編も長編も、書こうと思っただけから出てくるのではなくて、だいたい7、8年……もっと前、たぶん20代の初めの頃からこういうものを書きたいということが先行していたんですね。ひらめきというものも、日ごろの蓄積がなければ出ないものです。私の場合、小説を書くことは、商品をつくるのではなくて、目に見えない人の気持ちとか、定規などで測ることができないもの、五感を使って感じることでできない世界、人間を成り立たせているもっと大

きなものを、言葉、文章の力で表現する、その手段だと思っんです」

小説『巨食症の明けない夜明け』で、第11回すばる文学賞を受賞したのは1987年。当時彼女は、「ニュースステーション」(テレビ朝日系)のレポーターだった。そして、この話題をよんだデビュー作そのものの、番組作りの中で関心を持ち続けたテーマがもとになって誕生している。

「あの当時、摂食障害の問題がたくさん起こってはいたんですけども、番組で取り上げられなかったものがとても多かったんです。私はそのころ、金曜日に『奥様教養シリーズ』というコーナーを担当していました、住宅地で買物姿の奥様に食べ物についてのインタビューをするんです。ところが、たとえば皮のついた魚の切り身を見せて「これは何ですか?」って聞いてもわからない人が意外なほど多かったんですよ。食べ物の基本的な知識を知らないひとがいっぱいいるのに、あのころは、今よりもっとグルメブーム真っ盛り。TVでそういうグルメ番組ばかりだったのに、その一方で、ニュースに取り上げられることもないまま、食べ過ぎに悩んで自殺して行く女の子たちがいる。どうして彼女たちはそうして死んでいくんだらうということに、すごく興味がありました。高校時代も短編は書きましたが、あんなに長いものは書いたのは初めてでしたね」

私に、TVの仕事は向いていない。

島根県出身。少女時代から小説や詩を

書き、文部省のコンクールで入賞もしている。それが、大学では政治学を専攻し、4回生の時に6600人の応募者の中から選ばれて、TVの世界へ……

「高校が島根の県立出雲高校でしたから、こんな地方の高校生が進路相談の時に『作家になります!』なんて言ったら『何をバカなことを……もっと地道に考えなさい』って言われてしまいますでしょう? (笑)。小説を読むことはあっても、自分で書く側になると思ったこともなかったもので、大学では政治学を勉強しました。報道の仕事をするようになって、書くことは趣味でやっているかと思っっていたんです」

かすかに紗のかかったようなミステリアスな笑顔と、ちょっと古風にも聞こえる独特の甘い語り口はTVから受ける印象そのまま。けれども画面よりもはるかに若々しく、何よりも小気味良いまでに、自分の理性や生理に対して潔い。その彼女が「ニュースステーション」でレポーターや天気予報の仕事をしたが、常に意識し続けているのは、「私はTVの仕事には向いていない」ということだった。

「向いていないと思える理由はいくつかあるんですけど。まずTV局の仕事は大きな集団作業です。そして出演する側から見ると

完全に男社会で、女性のスタッフがほとんどいないんです。それに、男性のキャスターの方は、年齢や経験を重ねると、顔のしわも白髪もその方の幅となって魅力的といわれるんですが、女性の場合は40歳を過ぎると特別の場合を除いては、一線を退いて後進の指導に当たるといように、女性差別と年齢差別がありますね。だから出演する側にいることは、女性にとつて長期的な展望の持てる仕事ではないなと思っました」

だからといってTVが嫌い、つまらないというのではない。TVと彼女では、表現の方向性が違っっていたということなのだろう。「ご申しますのは、番組でしばしば小さな取材に出掛けてましたが。その時のスタッフ5人なら5人、同じものを見て、同じように感動した取材でも、最終的には、やはりディレクターの指示や視点で、映像が作られていくわけです。ナレーションも、編集も、音声も……。TVは、事実をそのまま映すわけではなくって、振り手とか編集する側の主観によって、何を出したいかということが決まってきます。それぞれのパーソナルの方、たとえば、カメラさん、音声さん、照明さんはみんなプロの方ですから、当然それぞれ工夫を凝らして仕事をするんですが、私は編集の過程で切り取られていくも

のが気になっ……。メジャーな興味というよりは、ちょっと視点をずらしたところから見、考えるのが、どうも私は向いていないんだとわかりまっしてね」

自分の好きなテーマを好きな見方で。それにはやっぱり、子供の時から好きだった書くことしかない。しかも報道というのは、振り手の主観が入るといっても、やはり現実である。現実だけでは伝えられないものが、創作では表現できるのではないか。「ですから私は、ひとりりて調べて、一から十まで自分で把握して表現する方が向いてるなど分かったんです」

個人的には、とつても恥ずかしいですよ

「植物性恋愛」(偽りのマリリン・モンロー)「別れの美学」(性の美学)など、彼女の作品の魅力は、豊潤な言葉を重ねて、現代女性の心理や生理を、原色のままの大胆さと知的な鋭さで描く文体にある。読み手はそこから、生々しさとか、時にはドロドロとした血の匂いのようなものさえ感じることが出来る。けれども、本人に言わせる



「理が走っていて、小説じゃないってよく言われます（笑）。ただ小説を書く時は、エエカッコシイじゃないんですけど、ちょっとふだんの自分と違う観点をもたないと……」
ということになる。書くという事は自分自身をさらけ出すという作業でもある。感覚的なことを表現する場合はなおの事、ましてセクシャルな事柄となると、女性としての戸惑いはないのだろうか。

「私にはその事の方が不思議で……、誰にでも当たり前にある感覚なのに、どうして書かないのかな。誰も書かないから、キチンと書かなければと思いますね。ただそれだけじゃなくって、学生時代から、女性問題とセクシャリティーに興味がありましたから、これまでの集大成として、この春に性愛論『性の美学』を出しました。また、グリム・アンデルセン童話を女性学から批評小説に書き直したものを、いま角川書店の『野性時代』に連載しているんです。性について関心のない人はいないはずですから、男の方にも読んでいただきたいと思っ
て」

作品の中の感覚と、作者自身の感覚を同一視されがちなことについては、

「私は作り手と編集サイドがわかかっていれば、読者はどういう風に読んでくださってもいいです。作家の手を離れたものは、受け手の自由。そのくらい真に迫って読んでくださったということは、評価して下さったと思いますから。俳優さんでも、女優さんでもそうだと思いますけど」

そして、ちょっと首をすくめるようにして「こういう事も、仕事として書くのはいいですけど、フト我に返ると、個人的には恥ず



かしいと思うこともあります(笑)。でも恥ずかしいことじゃないんだという意識で書かないと」

と笑う。このナイーブさがいい。性に関するものといえば、男性側の視点で描かれた物が実に多い。そんな中で彼女の姿勢には思わず拍手を送りたくなる。

「日本の場合、セクシュアリティの差別の基準が甘いので、最近いろいろ巧妙になってきていますよね。例えば最近おかしかったのは、『あなた顔だけで世間渡っていけると思ってるんでしょ』『はい、私脱いでもすこいんです』という、CMがありますよね。特に差別だとは思わないけれども、これをどういう意図で作ったのかという質問状を出したグループがあり、これに対する答えが傑作だったんです。『女の人は今や能力だけでなく、服を脱いで裸でも勝負できる時代だということ。これは差別ではありません』ですって(笑)」

時代の風の流れをつかむことも、テーマや表現に影響してくる。

「小説は、その時のものとか、流行のものをし過ぎると、もう数年後には読めないということになったりします。売れる本ですと5、6年後に読む人もいっしょるので。」

それから私は、ゲイ、レズビアンの人権問題の活動もやってまして、今年の4月、NHKの衛星第2放送で、同性愛とアートを扱った『禁断のサンクチュアリ』という番組をやったんです。ところが、過激すぎるっていわれてしまって。ワイセツな事は全然やってないんですけど、同性愛は、異性愛の男性に不安を与えるんでしょうね。映

画紹介とか、過去のゲイ芸術家の紹介ですとか、そういうゲイカルチャー番組だったんですけど、受け入れられないということでは、ちよつと早すぎたかなあと思いました。」

『赤毛のアン』の台詞はナゾだらけ

白のアンサンブルのスーツにパールネックレス、そしてツバ広の黒の帽子。そのちよつと皇室風の装いは、彼女の長い髪やノーブルな面立ちに良く似合う。ところが、それと作品のイメージとのギャップが大きすぎて戸惑ってしまう読者も多いらしい。

「私は外見よりも書いている物の方が自分に近いと思います。どうしてかっていうと、内面はほとんどオヤジですから(笑)。趣味として女装趣味というのがあって、自分で女装して、自分で興奮しているという変態なので(笑)。自分で着物を着て、内股がずれたりすると、うれしいうって……女の人が好きです。ただ私の場合、書いたものそのままのオヤジで出ていると、社会的にもうまくいかなんで、女装してるのかもしれないです」

この取材の翌日、彼女は京都の有名な古い師のところに出掛けてみた。見てもらうと、ナント松本侑子の前世は一回の世を除いて全て男なのだという。「やっぱりという感じ(笑)。私、前から男性に『キレイですわね』なんていわれると、気持ち悪くてしかたがなかったんですが、これはそういうことだったんですね(笑)」



profile 松本侑子

1963年 島根県出雲市生まれ。筑波大学社会学類卒業、政治学専攻。テレビ朝日系列「ニュースステーション」出演をへて、87年『巨食症の明けない夜明け』で第11回すばる文学賞受賞し、作家生活にはいる。関西文化に興味をもち、92年から2年半あまり、大阪に住んだ。現在は東京在住。

主な著書に『植物性恋愛』、『偽りのマリリン・モンロー』(以上、3冊とも集英社文庫)、イギリス文学からの引用を解明した新訳『赤毛のアン』(集英社)、失恋論『別れの美学』(角川文庫)などがある。最新刊は、性と愛についてのエッセイ集『性の美学』(角川書店)。

彼女のこんなオヤジ発言を、いわゆる、単に夢見がちな少女ではなかった」と解釈してみると、彼女の素顔に近いものが、しだいにハッキリしてくる。そのひとつ「赤毛のアン」の翻訳を手掛けるきっかけからも、それはうかがい知ることができる。

「『アン』の翻訳を依頼されたときに、女性問題を扱っている私としては、ああいう女の子向けの物語は私のジャンルじゃないかと思ったんです。ただ翻訳自体はしてみたか

ったんです」とりあえずペーパーバックを買ってきて原書で読んでみた。それはかつて日本語に訳されたもので読んだ「アン」とは、あまりにも違っていた。

「私が子供のころ読んだ『赤毛のアン』は著名な方が訳されたものなんですけど、誤訳と省略が多くて、全く不当に、これも向けのセンチメンタルな話にされてしまったというところに気がついたんです。ですから、

シャロネクレオーレ

酵素・卵白配合の洗顔パウダー
サンプル全員にプレゼント!

きれいなお肌してますか?

美しい素肌の基本は洗顔。いくら栄養を補給しても
汚れが残っている肌は吸収してくれません。

「シャロネクレオーレ」は天然酵素と
卵白配合の自然派洗顔料。

ひと皮むけたような
自然で新鮮な素肌が、取り戻せます。



シャロネクレオーレ	姉妹品	
●敏感肌・乾燥肌に	●ニキビ肌・脂性肌に (シャロネ)	●香料が気になる方に (キュアレ) (無香料)
30g × 1ケ…1,800円 ×2ケ…3,500円 ×3ケ…4,800円	80g × 1ケ…3,000円	40g × 1ケ…1,800円 ×2ケ…3,500円 ×3ケ…4,800円

【他にはないシャロネクレオーレの特徴】

1. 天然酵素パパイア配合で メイク汚れまでスッキリ。



パパイアから抽出した天然酵素パパインは、
生きている細胞には全く作用せず、死んだ
細胞(老化角質)を見分けて落としてくれる
スグレモノ。優れた洗浄力で、メイクの汚れ
や古い角質はもちろん、気になっていた鼻の
頭の黒いポツポツまでキレイに取り去ります。

2. 新鮮な精製卵白配合で 洗い上がりはしっとり、なめらか。



精製卵白は肌に近いタンパク質。だから、敏
感肌の方にも安心。洗いながらキメを整え、
ゆで卵のようなツルンとした素肌が手に入
ります。

PRESENT/ サンプル希望の方はハガキかFAXに住所・氏名・
電話番号・生年月日を明記し、下記まで!

〒630-02 奈良県生駒市辻町756-1 ネオハイツ東生駒2-A
ラピエ株式会社
FAX 07437-5-7423
商品に関するお問い合わせは ☎0120-85-8818
パバイヤ

The
Real
Face

これは私がちゃんとした翻訳を出さなければ
と思つて、翻訳の依頼を受けました」
翻訳というのは、他人の文章を自分の感性
や文体で表現するものである。でも彼女は
決して異訳はしない。自分の感覚で、勝手
にかえたり抜かしたりしない主義である。
「……というのは、原作には詩のような、お
芝居のセリフのような不思議な文章がいつ
ばい出てくるんです。もうこれはナゾだら
けだと思つて、それでこのナゾを解きたい
と……。例えばアンの会話に出てくる「故
郷ヒースの丘に立つて……」とか「アルプ
スの山が連なつて……」などは、カナタに
はない風景の描写です。これはなんだろう。
これまでの翻訳者だったら、抜かすか、そ
のまま意味不明のまま訳すかどちらかなん
でしょうけど、私は絶対これは何か別の英
米文学からの引用だと思つて調べたんです
よ。本を借りてハバード大学の図書館ま
で行きました、ひとりです。江戸時代に出た
本ですから日本にないんです。ほんとに世

界中から資料を集めました。シェークスピア
も、原書で読んだことがなかったんです
けども、モンゴメリーの時代の教養とかた
しなみとして読まれていた英米文学書を随
分揃えました。そして「アン」に引用さ
れている句が、18〜19世紀ぐらいのイギリ
スの作家の作品の一説や、シェイクスピア
やホープなど、世界の優れた文学や評論か
らの引用だったということがわかつたんで
す。さらに遡っていくと古代ギリシャや古
代ローマのものまで引用されているんです。
これがきっかけで、英米文学を学ぶようにな
りましたし、それから、どんどん調べ
る対象が広がっていったんです」
翻訳をしている間にも、やっぱり自分で書
く方がいいと思うことがなかつたわけでは
ない。けれども、次第にこういう形で、英
米文学にふれるのもいいなあと思いはじめ
たという。「赤毛のアン」のあと、今密かに
考えている本は「足長おじさん」。

「これも古い訳しか出ていませんで、私に
訳させてください!私でないと引用出典を
きちんと訳せませんからッ!なんて出版社
の人に言つたりしてるんです(笑)」

西日本文化圏の女が 幸せを感じる時

震災の少し前まで大阪に住んでいた。
「婚約していたんですけど、大阪に住みたか
つたんで待つてもらいました」
理由は、執筆だけに集中したかった事。東
京でも、3、4日だれとも会わないことは
ザラだった。仕事の才能とは別に、これは
職業形態の向き不向きの問題なのだそうで
ある。
「関西に住んだおかげで、とても幸せになれ
ました、西日本の生まれ育ちなので。東京
の学校に入ってから13年間、ズーッと一人
で住んでたんですね。でも人付き合いの感
覚が私と全然違うんで、すごくストレスが
多かつたんですよ。でもその理由が分から
ないままだったんですけど、大阪に来てか
ら、そういうストレスが全部なくなったん
です。それで初めて、あ、私は西日本の文
化圏の人間だったんだということがわか
つて、おかげにいえば、自分のアイデン
ティティーが分かつたんですよ(笑)。ほん
とにホッとした、いるだけでうれいとい
う感じ。人なつこくって親しみやすくて:
私は東京の人間じゃないんだということ
がわかつたので、家ではいつもね、関西弁
と出雲弁でしゃべっているんです(笑)。
1月に結婚したご主人は、東京生まれの東
京育ち。
「アリクルートの月刊誌「ダウインチ」とい
う雑誌で、世界中の英米文学の作者の育つ
た土地や、舞台になった土地を旅する紀行
文を連載しているんです。掲載されている
写真は、夫が撮ったものもありますが、そ
れにしても、彼が写した私は全部ブスに写
つてるというのは、どういうことなんでし
ようかねえ。(笑)」